

## ◆2018年度スタディツアー日程報告

期間：2018/12/23～12/29

理事 小幡順子

### 12月23日(日)

- 08:00 福岡空港集合
- 10:30 ベトナム航空ハノイ経由
- 17:50 ビエンチャン着
- 19:00 ホテルチェックイン後、クアラオにて民族舞踊を見ながら夕食。

### 12月24日(月)

- 08:30 サムケ小学校にて贈与式  
じゃっど、校舎塗装用のペンキを寄付し卒業生と校舎補修を行った大工さんの3団体に感謝状授与  
この卒業生は実は校長の甥御さんで、学生時代は校長宅へ同居して通学していたとのこと。今は警察官として勤務。ペンキ代として300ドル寄付(ビエンチャンの平均収入2148ドル)  
サムケ小からの要望：教室の天井扇が1か所を残してすべて壊れている。残り教室分の天井扇が欲しい。(職員室、幼稚園、図書室を入れると6基?) 旧校舎の屋根根太がシロアリ被害、トタン屋根にも穴多数。学校としては天井扇優先希望
- 12:30 コンサップ邸にてランチ  
帖佐夫妻と橋本さんは、フェイフェイとマニパンの同行でアジャンの墓参り。他は徒歩にてタートルアン観光。合流後、タラサオ観光
- 15:00 ツウクツウクに乗りパトゥーサイへ移動、観光後ホテルへ。
- 19:00 ナイトバザールを楽しみながらナンカンバンへ移動。通訳の虫明さん親子と安井清子さん(ラオスでモン族の図

書館を3件運営している。)家族を招待して夕食会。

### 12月25日(火)

- 08:00 ホテルで朝食後、カムアン県に向かって移動。(虫明さんから朝食としてカオチャーパーティーの差し入れ。)  
通常6時間で移動できるビエンチャン～タケク間が7時間半ほどかかる。(今年の雨季は雨量が多く、国道13号線の舗装が剥がれ穴凹だらけになっていてスピードが出せなかった。)
- 17:50 ツン村小学校へ到着 予定より2時間近く遅れたのにもかかわらず、小学校入り口で子どもたちから花と拍手の歓迎を受ける。学校でホストファミリーと顔合わせ後、学生は民泊へ。  
大人組は、タケクへ戻り、ホテルチェックイン。ホテル近くの中華食堂にて夕食。

### 12月26日(水)

- 学生はそれぞれのホストファミリーと過ごす。
- 10:00 大人組みと合流。ツン村の田んぼ及びきゅうり畑見学。(みんなでタクタクに乗って移動)田んぼは乾季に向けて田植えの最中だった。田植えするほうが実入りがよいのだが、人手が足りない場合などには直播もしているということだった。「きゅうりのきゅうちゃん」の契約農家を見学。工場は村から5kmほど先の村にあり10年前から操業しているとのこと。ツン村では3年前からきゅうり栽培を始めたそう。見学した畑は栽培2年目の人で、まだ初期投資がかかっているのもそれほど収入はないといいながらも昨年度は千数百ドルの収益があったそう。(カム

アン県年間一人当たり平均所得 887 ドル)

ホストファミリーのお父さんや校長先生夫妻，セバンファイ郡教育局員，郡保健関係者を招待して昼食会。

昼食後，郡教育局長の故郷であるセバンファイ郡セバンファイ村を車窓から見学。教育局長の説明によると，サワナケート県との県境を流れるセバンファイ川の氾濫により，毎年のように雨季になると稲が流されるため，川沿いは食べる米もないほど非常に貧しい地区であったとのこと。生活が苦しいため，なかなか教育まで手が回らない家庭が多かった。

1995 年の灌漑工事により洪水被害がなくなり，また乾季にも稲作ができるようになったため，現在教育にも力を入れられるようになってきているとの事だった。それでも，川沿いの低い土地は毎年のように浸水被害があるそうだ。

郡教育局の皆さんと別れた後，校長宅へ戻り水分補給。暑さでグロッキーの学生 4 人は東屋でお昼寝。元気な学生 3 人は小学校へ向かい子どもたちと遊ぶ。(気温 30 度超えていた。)

大人組は，校長先生の奥さんが明日のバーシー用のパークワンを作るのを見学。橋本さんは少しだけパークワン作りに参加した。

16 : 00 学生はそれぞれのホストファミリー宅へ帰宅。大人組、タケクへ移動。

#### 12月27日(木)

09 : 00 大人組、寄贈するタオルや本、文房具等を持参しツン村小学校へ。学校で仕分け作業。

10 : 15 セレモニー開始

セバンファイ郡にある 9 つのクラスタ

ー中心校 9 校と郡教育局へパソコン一式贈与。セバンファイ郡には全部で 44 の小学校があり 9 つのクラスターに分かれているとのこと。小学生は現在約 3300 人在籍。式の様子は，翌日の地方ニュースで取り上げられたそうだ。式典の後，村人とともにバーシーを行った。

12 : 00 バーシー後、昼食会。

14 : 00 ツン村発 途中タケク市内のマーケット見学をしながらホテルへ移動。

チェックイン後、メコン川へ沈む夕日を見ながら小休憩。その後、シンダート屋へ移動し夕食。

#### 12月28日(金)

06 : 00 希望者のみ、ホテル近くのお寺の僧への托鉢体験。

07 : 00 ホテル出発

13 : 50 ビエンチャン市内の食堂にて昼食  
その後食堂前にあるタイ資本のスーパーマーケットで買い物

17 : 30 空港へ移動 チェックイン

19 : 40 ベトナム航空 ハノイ経由

#### 12月29日(土)

01 : 30 ベトナム航空 ハノイ発福岡行

07 : 20 福岡空港到着 空港にて解散

## ラオスタディーツアー報告書

鹿児島大学医学部3年 秋葉美里

私は大学で所属している国際交流サークルを通じて、じゃっど主催のスタディーツアーを知りました。以前青年海外協力隊の活動をしていた人の話や、アフリカで医療支援活動をしている川原尚行先生の話聞く機会があり、私は漠然と国際協力活動に憧れを持っていました。しかし実際に発展途上国と呼ばれる国を訪れたことが無かったため、今回初めてその現場を見させていただくことができました。

印象的だったのは、訪問先の小学校での子供たちとの交流です。私たちが学校に到着す



るとすぐに子供たちが列をなして、花束や手作りのネックレスを手渡してくれました。セレモニーの間も落ち着かずに興味深々で私たちを見つめる子供たち。一緒に遊ぶ時間になると、始めは恥ずかしそうにしていた子たちも全力でこちょこちょを仕掛けてくるようになり、ひたすら一緒に走りまわりました。言葉が通じなくても分かり合える貴重な経験でした。たしかにラオス

の小学校は設備が整っていない部分も見受けられましたが、それ以上に子供たちがのびのびと自由に過ごせる環境であることを肌で感じました。ツン村のホームステイ先では、家の子と庭で遊んでいると次々に近所の子たちが集まって来て、日が暮れるまで一緒に遊びました。大人は縁側から子供たちを見守っていました。ここでも子供たちを村の皆で見守る温かいコミュニティーの姿が垣間見えました。

また、ツン村を去る前日には、右の写真のようなバーシーという儀式をしてもらいました。村の人々が一本一本お祈りを込めてミサングを巻いてくれたのです。異国から来た私たちのことを温かく受け入れてもらえて嬉しかったです。ツン村の人々には感謝の気持ちでいっぱいです。



このスタディーツアーを通して、国際協力の裏には温かい人と人とのつながりがあることを知りました。

「支援」だけでなく「助け合い」や「交流」をベースにしているじゃっどの活動は本当に素敵でした。この経験を忘れずに、私もいつかは医療分野で貢献できるように精進していきたいと思います。



## ラオスタディーツアーに参加して

鹿児島純心女子大学 3年 吉永弥玖

私は、ラオスタディーツアーのことを知ったとき、「面白そう！教師を目指す私にとって絶対に良い経験になる！」と思い、すぐ参加を申し込んだ。申し込んだのはいいものの、その時の私はラオスという国はどこにあり、どんな国なのかも知らず、まずはラオスのことを調べることから始まった。ラオスに行く前に、「ラオスに行ってやりたいことリスト」を作った。ラオス語で会話がしたい。子どもたちと遊びたい。子どもたちと一緒に歌いたい。現地ではしか食べられないものを食べたい。ラオスの文化を知りたいなど。初めての海外渡航であることや知っている人がいない旅行であることへの不安もあったが、ラオスという非日常の世界へ行けることにとてもわくわくしていた。

私がこの旅において一番楽しみにしていたことは、小学校訪問で現地の子どもたちとふれあえることであった。小学校に着き、校庭から手を振ると元気よく振り返ってくれたり、手作りの首輪や花束をプレゼントしてくれたり、照れたような可愛い笑顔で、私たちを歓迎してくれた。ラオスの子どもたちは少しシャイで、初めは恥ずかしそうに遠くから見ている子も多かったが、子どもたちとの心の距離が縮まるのに時間はかからなかった。一緒に紙飛行機を飛ばして遊んだり、追いかっこをしたり、折り紙を折ったり、お絵描きをしたり、子どもたちのキラキラとした笑顔や、私の名前を呼びながらついてくる姿を見るととてもかわいくて、何よりも楽しい時間であった。今でも子どもたちのことを想うと胸がきゅっと切なくなるほど、私にとってかけがえのない時間であり、ラオスで出会った大切な宝物である。子どもたちと遊ぶ中で言葉が通じなくてむずがゆいこともあった。しかし、ジェスチャーを使ってお互いの言いたいことが伝わったり、同じことでおなかを抱えて笑ったりと、言葉が通じなくても同じ想いを共有できたときに日本では味わえない大きな感動があった。きっとこの体験は、「生徒たちの心を動かせるような言葉を届けられる教師になりたい」という私の



夢を後押ししてくれる経験になると思う。

日本に戻り、当たり前のように日常に溶け込み、ラオスに行った思い出がだんだんと遠のいてしまこともあるが、ラオスで経験したこと、感動したことをこうして思い出すことでラオスとまた通じ合えた気がする。

今回のスタディーツアーに参加してよかった。この貴重な経験をする機会を与えてくださった全ての方々と今回の旅で出会えた仲間感謝する。本当にありがとうございました。

## ラオスで得たもの

川内高等学校 2年 小畑愛花

私の将来の夢は小学校教諭になって、日本の子供の教育に関わることはもちろん、外国、特に発展途上国の教育に関わることです。じゃっどが行なっているスタディツアーは私にとってまさに興味深いものでした。広告を見たとき、迷いもなく応募することを決意しました。

実際に現地の小学校に足を運ぶと、子供たちは大きな声で挨拶して迎え入れてくれ、かわいい花でできた首飾りやブーケまで作ってくれました。子供たちのあの笑顔は、今でも脳裏に焼き付いています。ラオスの子供たちと遊んで、コミュニケーションを交わしたことで、より一層小学校教諭になりたい、という思いが強くなりました。

また、ホームステイで実際にラオスの暮らしを体験できたことは、私にとってとても貴重なものとなりました。最初は不安でいっぱいでしたが、最初の夜ご飯でホストファミリーとコミュニケーションを交わすと、すぐに緊張がほぐれました。ホームステイでの朝は、2日とも牛や鶏の鳴き声で始まり、外に出てみると、気持ちの良い鳥のさえずりが聞こえ、心地よい朝日が私を照らしてくれました。その情景は今でも鮮明に思い出されます。2日間生活してみて、日本と異なる点はいくつかありましたが、それはとても興味深いもので、日本よりいいなと感じるものもあり、また、日本での私たちの暮らしの質がどれだけいいことか、日本という国がどれだけ恵まれているのかを感じる事ができるいい機会となりました。

私は今まで、ラオスというと発展途上国というイメージしかありませんでしたが、実際に行ってみると、ラオスの人の優しく温かい心に触れ、柔らかい雰囲気やゆったりと流れる時間を感じ、ラオスのことが大好きになりました。この良さを私の身近にいる人たちにまず、発信していきたいです。また、今回のスタディツアーに参加したことは、私にとって大きな宝物となりました。そしてこれからも私にとって大きな意味を与えてくれるものになると思います。

今回のスタディツアーに関わってくださり、貴重な体験をさせてくださった全ての皆さんに、感謝したいです。ありがとうございました。



## 一期一会

川内高等学校1年 李 一衣

私は平成30年12月末、ラオスタディーツアーに参加させていただきました。実は、初めは自分が行くことができるなんて思ってもみなかつたし、ラオスのこともあまり知りませんでした。しかし、このツアーでこれからの自分の人生が変わった気がしました。

私が、ラオスに行って学んで、伝えたいことは「百聞は一見に如かず」ということと「一期一会」ということです。

ラオスはやはり日本とは全然違って、12月なのに半そで短パンだし、お風呂は水浴びが気持ちいいくらいだし、村では牛やにわとりや七面鳥が散歩していてびっくりしました。

私が特に心に残ったひとつにローワンティックさん家でのホームステイがあります。初めは言葉が通じない不安がありましたが、家族と一緒に食卓を囲んでご飯を食べることで、すぐに打ち解けることが出来ました。身振りや、絵にかいたりして伝えたいことをわかってもらったときの嬉しさは本当に言葉で言い表せないです。言葉が通じない状況を楽しいとも思ってしまうから不思議でした。自分たちが作ったカレーを食べてもらったり、一緒にトランプをしたり、忘れられない思い出がたくさんできました。



そして、もう一つは小学校訪問です。教室や校庭で過ごす子ども達は、充実した環境で勉強している自分の何倍も楽しそうで、すごくうらやましいと思いました。それほど子ども達はまぶしくて、一生懸命でした。子供たちとの時間も本当に私にとってかけがえの



ないものになりました。お別れの時、ちょっと泣いてしまったとき涙をぬぐってくれた小さな手は、今でも鮮明に覚えています。

気づいたことですが、都市部と田舎とでは少し差があり、小学校の環境も異なっているように見えました。

これらの体験は日本にいたるだけでは決して体験できないものです。自分の世界観が変わりました。自分にできることは少ないかもしれませんが、子供たちの笑顔がこれから先も続くようにまたやれることを探したいです。国境を越えて出会ったやさしさ、ラオスの現状、素晴らしさをもっと多くの人に知ってもらいたい。このツアーでホストファミリー、子供たち、そして一緒に思い出を刻んでくれた仲間に出会えて、本当に幸せです！書ききれないくらい素晴らしい体験をしました。この機会をくださった方、支えて下さった方、すべての方々に感謝します。



## スタディツアーに参加して

川内商工高等学校 機械科 3年 中須泰聖

私が今回のスタディツアーに参加した理由は、就職を前に1度海外に行き、見識を広めるためだ。初めての海外で、発展途上国と言われているラオス人民民主共和国。トイレが水を桶で汲んで流すものであるとか、今でも地雷で怪我をしている人がいる等の様々な話を耳にし、とても不安だった。しかし、ラオスに着き想像より遥かに綺麗な街並みを見て、不安になっていた私が恥ずかしくなってしまった。さらに、道路を高級車メーカーの車が走っているのを見たときはとても驚いた。だが、それはビエンチャンだけの話だった。

ジャッドが支援している小学校を訪問し、次の日にカムワン県のツン村に移動しているときのことだ。所々集落のようなものはあるのだが、その殆どが簡素な家ばかりで、窓にガラスがある家などめったに見られなかった。首都であるビエンチャンとは大きな違いを感じた。ビエンチャンは著しい経済成長の恩恵を受けた成金が多いらしく、そのせいでこんなにも地域格差があるそうだ。

私が見学した2つの小学校では、教室に明かりがなく、気温が高いにもかかわらず冷房器具は換気用のファンしかないのである。村にも街灯が1つもなく、夜はとても暗い。しかし、そんな環境であっても子供たちや村の方々は皆とても笑顔で楽しそうだった。とくに子供たちの元気は凄まじく、圧倒されてしまった。彼らにカメラを向けると、はじめは逃げたり全く笑ってくれないのだが、誰か一人を撮った写真を見せると皆笑顔でカメラに寄ってきてくれるようになったのだ。

ホームステイでは日本と全く異なった食文化や生活リズムに初めは戸惑っていた。しかし、優しい村長さんが色々教えてくれたおかげで幸せに三日間のホームステイを終えることが出来た。簡単な会話は身振り手振りでやりとりすることができ、笑顔で伝えようとすると、相手も笑って理解しようとしてくれたのを見て、やはり笑顔は万国共通なのだなど、とても感じた。また、ツン村では非常に時間の流れがゆったりで、様々な価値観が日本とは異なっているのだと痛感させられた。

今回のスタディツアーでラオス人民民主共和国がどのような国かわかった。地方と都市で格差があるものの、人が非常に優しく、暖かみのある国だということを身をもって知ることが出来た。ラオスで過ごしたこの七日間の事は自分の中でとても大きな出来事になった。大人になってからまたラオスに行きたいと思う。本当に意義のあるツアーだった。ありがとうございました。



## ラオスで見つけた指針

れいめい高等学校1年 長谷部泰地

『自分はどれだけちっぽけな存在なんだろう』私が福岡を飛び立ち、飛行機の中から小さくなった日本列島を見下ろしながら自然と頭の中に浮かんだ言葉だ。

12月23日、待ちに待ったラオスへの飛び立ちの日だ。福岡空港の国際線ロビーで他の学生メンバーと合流したが明らかにギクシャクしている。まあ初対面だから仕方ないだろう。私の旅のスタートはこんな感じだった。そんな私がラオス行きを決意したのは、初めて海外に行けるチャンスだからというゲスな理由ももちろんあった。しかし一番の理由は宗教だ。日本人は宗教に対して負のイメージばかり持っている。しかし私は日本人の若者の自殺率が先進国でも群を抜いている理由はそこにあるのではないかと思う。宗教の定義は宗教学者の数だけあると言われているが私は宗教の定義は「理由」を与えてくれる何かしら目的を持った集団だと勝手に思っている。生きる理由、行動する理由、信仰する理由、そして戦争をする理由。歴史を遡れば宗教や民族が理由の戦争なんて数え切れないほどある。宗教はそれほど影響力を持つものだ。ラオスは仏教国だ。それも日本の大乘仏教とは似ても似つかない上座部仏教だ。それがどんなものなのか実際に自分の目で確かめたかった。2日目にラオスの首都ビエンチャンを観光する前にある小学校に立ち寄った。そこでの体験は多分一生記憶に残るだろう。恭しく式典を終え子供たちと遊ぶ時間が

やってきた。正直私は子供のことがあまり好きではなかった。なぜならまだまだ無知だからこそ無意識にだれかをいじめたり残酷なことをするからだ。しかし私のそんなイメージは一瞬で払拭された。純粹だった。とにかく純粹だった。私がやったことに対して純粹に笑ってくれた。それがとても嬉しかった。心が洗われた気がした。宗教に関して偉そうに語っていたがこの笑顔を見ているとそんなことどうでも良くなってきた。それほど衝撃を受けた。ラオスでは今だに経済的格差やベトナム戦争時の不発弾の問題が残っていると聞いたが、この笑顔を守りたいと思うとその問題の重大さがわかった気がした。その子供たちの中に坊主頭で糞掃衣という仏教の服を着た子供がいた。どうやら出家した子供のようだ。そんな子供が他の子供たちと一緒に遊んでいる姿は日本では見られないものだろう。日常生活に溶け込む宗教。ラオスの人たちが温厚で優しいと言われるのはこのようなところが関係しているのではないか。ラオスの仏教国としての顔が垣間見得た瞬間だった。



やってきた。正直私は子供のことがあまり好きではなかった。なぜならまだまだ無知だからこそ無意識にだれかをいじめたり残酷なことをするからだ。しかし私のそんなイメージは一瞬で払拭された。純粹だった。とにかく純粹だった。私がやったことに対して純粹に笑ってくれた。それがとても嬉しかった。心が洗われた気がした。宗教に関して偉そうに語っていたがこの笑顔を見ているとそんなことどうでも良くなってきた。それほど衝撃を受けた。ラオスでは今だに経済的格差やベトナム戦争時の不発弾の問題が残っていると聞いたが、この笑顔を守りたいと思うとその問題の重大さがわかった気がした。その子供たちの中に坊主頭で糞掃衣という仏教の服を着た子供がいた。どうやら出家した子供のようだ。そんな子供が他の子供たちと一緒に遊んでいる姿は日本では見られないものだろう。日常生活に溶け込む宗教。ラオスの人たちが温厚で優しいと言われるのはこのようなところが関係しているのではないか。ラオスの仏教国としての顔が垣間見得た瞬間だった。

今回私のテーマであった宗教に関しては今回の旅でまだまだ勉強不足だということを思い知らされた。そして一つの夢ができた。それは物資や金銭面だけではなく宗教という観点から発展途上国や私たち日本人の心を支援する何かをしたいという夢だ。まだ具体的なことが決まっているわけでもないが、裕福な国日本で自殺者が多い現状を宗教の力で変えたい。そんな絵空事の夢だ。まだまだ知らない事もたくさんある。社会への影響力も0に等しい。だがそんなちっぽけな自分がどこまでできるのか。このラオスの旅は私に新たな選択肢と新たな夢と何より「理由」を与えてくれた。



## ジャッドスタディツアーに参加して

志學館高等部1年 若松 晴香

今回、ジャッドスタディツアーに参加させていただきました。今回のツアーは私にとって二回目でした。一昨年初めてラオスを訪れ、人々の温かい心に触れて、もう一度訪れたいと思っていました。また、昨年からはまったホームステイに強く興味を持ったため希望しました。ラオスでの日々は毎日とても充実していましたが、その中でも特に印象深かったものを挙げようと思います。

まず、一番の思い出はやはりホームステイです。初めての体験であり英語も通じないため、初めは、期待する反面、不安や緊張もありました。しかし、その感情はすぐに無くなりました。ホストファミリーの皆さんが優しく迎えてくれたからです。私達と同じくらいの年齢の家族もいて、一緒にトランプをして遊んだり、カレーを作ったり、髪をアレンジしてもらったりと、言葉が通じないことは関係なく楽しくて、仲良くなることができました。初めは、言葉の壁というものを重く感じていましたが、言葉よりも心が大切であることを実感した三日間でした。また、私達のためにふかふかなベッドや、扇風機二台、シャワーなどの準備をして下さり、その優しさにとっても心が温かくなりました。

次に心に残った思い出は、小学校です。子供達は、最初は恥ずかしがっていたけれど、時間と共に馴染んでくれました。一緒に鬼ごっこをしたり、ちょこちょし合ったり、小学生に戻ったみたいに思い切り遊びました。疲れるくらい遊びましたが、それ以上に子供達がとても可愛くて、とても癒されました。小学校でも、子供達との間に言葉の壁を感じることはありませんでした。

そして、子供たちにより充実した学習環境で学んでほしいと思いました。このジャッドの活動に少しでも携われたことを嬉しく思います。また、小学校を見学して、日本とラオスの違いを実際に見て学ぶことができました。私も高校生になり、勉強が大変な時期になります。この体験を通して、日本の学習環境が恵まれていることを改めて実感しました。勉強だけでなく、これからの生き方にもこの経験を繋げていきます。

最後に、このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



## スタディツアーに参加して

姫野治子

私がツアーに参加したかった理由はいくつかありました。そのうちの一つは、寄付者の義務として、活動を実際に見てみたいということでした。もう一つは、じゃっどのスタッフが愛情を降り注ぐ、ラオスという国をみたい、ということです。

町並み、人々は美しく、食べ物は、香り立つような美味しさでした。じゃっどが、寄付した学校は立派でした。子供達、住民の皆さまからは、感動的な歓迎を受けました。

一番印象に残ったのは、学生さん達とじゃっどのスタッフでした。不自由さを覚悟して行ったとはいえ、学生さんたちの態度は、堂々としていて、また謙虚で親切でした。手で食べる姿は、地元の方と変わらず、子供達と遊ぶ姿は立派でした。さすがは、各学校を代表してこられた方々だなあ、と思いました。ホームステイ先への手作りの心のこもったプレゼント（絵、ゴム版画など）、どうやってお礼を伝えようか、ラオス語で冊子に載っている限りの言葉で感謝を表そうとする姿、ホームステイ先のごはんが一番おいしかった、という言葉。異なる文化を受け容れる姿に感動しました。別れ際に、子供たちのみならず、地元の人々も涙で別れを惜しんでいたのが忘れられません。各学校に戻られたら、それぞれの立場で、将来の地球のために、ご活躍されることと思います。

じゃっどのスタッフと地域住民との強く熱い信頼関係に圧倒されました。学校について子供達の大歓迎を受けるのですが、新参者の私は、花輪を首に掛けてもらったり、花束を頂戴したりしました。横にいた小幡さんは、‘OBATA! OBATA!’ 時々 ‘OBATA san!’ と大声で呼ばれています。OBATA さんは、顔が知れていて、地元のスタッフということになっているのか、誰も花を渡さず、、、、すいません、横にいた私が、たくさんの花束を頂いてしまいました。ソムチット先生、コンサップ先生、そのご家族、御子弟、村長さん、教育長さん、学校の先生、そのご家族、さらには、ローカル食堂のおかみさん (!)、多くのラオスの人々との繋がりに圧倒されました。

学生さんやスタッフさんに元気をもらいました。私は開業医です。毎日自分の仕事に追われて、他者を思う余裕がない私ですが、ツアーに参加して精神的に健康になりました。寄付がこれからもラオスの子供たち、そして学生さん派遣に使われることを希望します。



OBATA san と私



学生さん（元気で、行って来い！）

## ラオス視察旅行を終えて

阿比留裕美

私が初めてラオスの国の名前を身近に感じたのは、5年ほど前に机と椅子の寄付をした時です。それから、どんな国なのだろう、と少し関心を持つようになっていましたが、今回視察旅行に参加するまでは恥ずかしながらベトナムの近くの国かな、くらいではっきりした場所も知りませんでした。

ですからこのラオスの訪問する機会を頂き楽しみにしていました。そしてビエンチャンに着いて思ったこと。緑が多くて綺麗な町だなあ、と。あと、車もたくさん走っていて、お店も多く私が想像していたより発展しているように感じました。

過去に東南アジアの幾つかの国を訪れたことはありますが、観光地がほとんどだったので、この旅行で普段は訪れる事のできない学校や村を訪問して、直接子供たちや村の人達と交流を持てた経験は得がたいものでした。

子供たちの明るい笑顔やラオスの方々の素朴な親切な人柄に癒され、一昔前の日本もかつてはこうだったのかな、と思われて国は違いますが通じるものがあると思いました。

米作りが二期作になり、キュウリの栽培も始めて以前に比べて生活が良くなっていると話聞いたときに、村へ向かうバスの中から見たたくさんのゴムの木が頭に浮かびました。ラオスの自然が壊されないか気になっていたのも、暮らしを良くする選択が他にもないものかと考えさせられます。

以前、このボランティアのことをある友人に話したところ、ただお願いします、と言うだけで援助をしてもらえているのはおかしい、働かないで暮らしをよくしようと思われて賛同できない、と言われました。その人は教育者だっただけに思ってもいなかった意見に驚いて、頭の隅にずっとその言葉が残っています。

ですが、実際に子供たちに会って私はやはり支援は必要だな、と思いました。生活面はもとより、絵本や学用品等は子供たちの感性を広げるのにとっても役立つものだと思います。

これからも私にできることは続けたいし、多くの人にラオスのことを知ってもらえるように伝えていきたいと思います。

じゃっどの皆さま、良い経験をさせて頂きありがとうございました。





## ラオスタワーに参加して

床波千秋

最初にこのスタディツアーに誘っていただいたとき、「えっ、ラオス?」、国の位置も定かではないほど、ラオスという国のことを考えたことはありませんでした。友人に話すと、「今は結構観光スポットにもなってるらしいよ」とのこと。一方、イギリス人の知人に話すと「Poor (貧しい) なイメージ」との返事。はたしてラオスはどんな国なんだろう、と思いながら、下調べをする間もなく出発の日を迎えました。

到着したビエンチャンは空港も新しく、道路も広くよく整備されている印象。二日目に行ったタート・ルアンは外国からの観光客も多く、メコン川沿いのナイトマーケットなどは活気があり、これからますます発展していく国の力強さを感じました。

ビエンチャンを離れ、タケクに向かう道のりは長かったにもかかわらず、車窓から見えるすべてが新鮮でした。大きな建物もなく、小さい露店が立ち並んでいたり、牛が道路のすぐそばを歩いていた、飽きることなく八時間のバス旅を満喫することができました。



途中、印象的だったのが、プランテーション作物のゴムの木の林でした。換金作物で、もう田んぼや畑には戻せないという説明に、自然災害や売れなくなった時の危うさを感じざるを得ませんでした。また、ビエンチャン市内でも、ときどき大豪邸が出現し、それは木材で儲けた人の家ということでした。ラオスは山が多く、木材も大きな産業の一つですが、違法伐採による森林破壊や、安くで売買されることによって働く人の賃金もまた安くなる、という懸念があります。帰ってから調べたことですが、木材を輸出する国の森林破壊などを防止する目的で「クリーンウッド法」が一昨年、施行されました。合法的に伐採された木材しか流通させないことで、原産国の森林を守っていくというものです。また、福岡県の家具の町として有名な大川市では、ラオスから人材を受け入れ、木材加工産業の技術者・経営者を育てる取り組みをしているようです。自国で加工までして輸出できれば大きな経済効果が期待できるからです。このような取り組みでラオスの山々や人々の暮らしが少しでも守られていってほしいと思いました。

ツン村では、小学生や村の人々が歓待してくれました。耕運機での田んぼやキュウリ畑の見学、バーシーという儀式など貴重な体験をさせていただきました。首都ビエンチャンと、犬や鶏と一緒に暮らすツン村との発展の度合いはかなり違いましたが、地方には地方の豊かな生活があることを感じました。そして、物にあふれ、水や紙を無限にあるかのように使う日本の生活を改めて考えさせられました。

私にとって、初の海外旅行でした。このようなツアーが初の海外体験となり、とてもうれしく思っています。最後になりましたが、帖佐夫妻、コンサップ夫妻の長年の活動の継続を知って、本当に感銘を受けました。外国でポリオ撲滅、保健衛生の普及、学校支援など誰でもができることではないと思います。ご一緒させていただき、ありがとうございました。また、「じゃっど」スタッフの皆様、このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

## スタディツアー2018 総括

帖佐 徹

主たる活動;

- (1) 小学校訪問・交流セレモニー:ビエンチャン市サムケ小学校、カムワン県セバンファイ郡トゥン小学校の2校を訪問した。トイレ、水道、電気、絵本、教育資材など以前供与したものの確認や今後必要となる支援の協議を行った。また学校保健に加えて、老人保健も加えた新しいプログラムの協議も行った。学生たちの主活動は、子供達と交流することである。日本のおもちゃ、シャボン玉、縄跳びなど使って、言葉は通じなくても、一緒に遊んでいた。
- (2) 教師トレーニング:セバンファイ郡衛生局長、郡に所属する11の小学校の校長及び教師が集まり、ラオス語訳をつけた日本の健康教育絵本の読み聞かせ法を教授した。その後、学校保健や教育の現状につき、情報交換を行った。ハンドオーバーセレモニーに引き続き実施された。
- (3) 教育機材供与・ハンドオーバーセレモニー:毎年実施する健康教育絵本やスポーツグッズ、タオルのほか、本年度は特例として、コンピュータ10台の供与を郡教育局及び9小学校に行った。これはラオスでも、年々教育方法のIT化が進み、教育現場としても対応せざるを得ないためである。かつてコンピュータ供与は無駄の典型とされ忌避されてきたが、ラオスでもほとんどの人がスマートフォンを使用する時代であり、パラダイムシフト(注)は起こっている。コンピュータートレーニングコースの実施とバックアップ体制の確保を条件として、供与が実現した。
- (4) ホームステイ:日本の学生により深くラオス農村の生活を理解してもらうために、2泊3日のホームステイを今回も実施した。ホストファミリーは村長や中学校長など責任ある立場の方々にボランティアで協力していただいた。学生7人は男女別、年齢別に3つのホストファミリー宅に分かれて宿泊した。報告者も引率として、通訳者と共に、ホームステイした。学生の健康と安全を守る立場から、夜間と早朝に各家庭を巡回するとともに、各ホストファミリーとの連絡を行った。飲み水や生食の問題は以前よりカウンターパートと協議しており、飲料水はペットボトル水のみとすることや、生食やアルコールの禁止、アレルギーの有無、辛い物の好き好きの確認などは了解済みであった。異文化理解活動として、トラクターによる広範囲の田園訪問を実施し、二期作の田植え中の田んぼや、日本に輸出するキュウリ(キュウリのキューちゃん用)の畑、用水路などを見学した。村の特産のバナナ皮製被り傘作りや機織りも見学した。学生たちにとっては、牛や豚や鶏、アヒル、七面鳥、犬が放し飼いで闊歩し、道に牛糞が当たり前のように落ちている風景は、初めてみるもので興味津々であった。何でもやってみる好奇心もあり、蟻卵のオムレツも食べ、アムナム(井戸水行水)も試していた。ホストファミリーでの食事は、ラオス料理初体験の子供たちにとっても素晴らしく美味しく、感動していた。食中り等の病気はなく幸いであった。2日目の夜は、各家庭で旅の安全を祈るバーシーの儀式があった。
- (5) 住民との交流:ホームステイ最後の3日目は、トゥン小学校でバーシーを村全体で開催してもらった。その後、送別セレモニーとして、女生徒たちによるラオ式ダンス(バサロップ)があり、おかえしに学生たちの「幸せなら手をたたこう」ダンスがあり、子供達も一緒に踊っていた。その後は大人の時間で、モーラムという民謡に乗せて女性と男性が輪になって踊るランボンダンスとなった。3日間ですっかり親しくなったので、お別れの時、子供たちのみならず先生たちまで涙ぐんでいた。

(注)パラダイムシフトとは、当たり前の常識や前提が大きく変わること。